

まえがき

途上国の農業部門と聞けば、多くの読者は貧困や低開発を連想するのではないだろうか。工業部門やサービス業部門は、技術革新による生産性の向上により、経済成長の原動力となっている。それに対して農業部門は、政府による振興政策にもかかわらず、生産性は向上せず、所得は低いままである。これが途上国の農業部門に関する一般的な見方であろう。途上国の農村を歩くと、現在でもそのような農業を多く目にする。

しかし途上国の農業部門でも、土地の売買や貸借が増え、農作業の機械化が進み、農産物の生産と流通がつながり、生産資金の調達が容易になっている。これらはバイオテクノロジーを利用したゲノム編集やICT技術を応用したスマート農業などの技術革新と比べると地味な変化ではある。しかしこのような変化も同様に、農業生産に関わる組織や経営管理に大きな変化をもたらしうる。

のどかな風景が残るアジアやラテンアメリカの農村でも、ダイナミックな変化を目にする機会が増えてきた。農作業の受託サービスの発達により、田植えから収穫までを電話による手配だけで済ませる生産者。地方政府や農業協同組合のイニシアチブによって零細小規模圃場がまとめられ、アグリビジネス向けに原材料を供給するようになった大規模農場。異業種から土地を購入して農業に参入し、複数の作物を生産し加工まで手がける経営者。多くの雇用労働力を管理し先進国の流通企業に直接販売する株式会社。資金調達と購買・販売を工夫して規模を拡大する穀物生産者。これらの事例は数の上ではわずかに過ぎない。しかし、途上国で成長する農業生産者は、今後の食料供給の担い手になり得る。

そこで本書では、アジアとラテンアメリカの農業部門を研究対象とする研究者が、ダイナミックに成長する農業生産者を対象にフィールド調査を行い、

その特徴を明らかにした。そしてこれらの共通項から、途上国における食料生産の担い手となる農業経営の特徴を考察している。

本書はアジア経済研究所において2016～2017年度に実施した「途上国における農業経営の変容」研究会（主査：清水達也，幹事：塚田和也）の成果である。研究会では，国内外の農業や農業研究の動向に関して，専門家の方々から知見の提供を受けた。途上国の契約農業については，大塚啓二郎アジア経済研究所 所長主任調査研究員，日本における農業への異業種参入については，納口るり子筑波大学教授，途上国における高付加価値農水産物の生産者と流通構造については，鈴木綾東京大学大学院准教授，ITを活用した農業生産管理システムについては，秋野陽太郎富士通株式会社イノベティブIoT事業本部マネージャーらに話をうかがった（肩書きはいずれも当時）。ご協力をいただいた方々に深くお礼を申し上げる。くわえて，本研究会で議論したアジア経済研究所の伊藤成朗氏，児玉由佳氏，坂田正三氏にも感謝したい。

途上国の農業に関してアジア経済研究所では以下の成果も発表している。本書と合わせてご参照いただきたい。

- ・清水達也編「途上国農業の新たな担い手」基礎理論研究会成果報告書（アジア経済研究所，2016年3月）。
- ・清水達也編「途上国における農業経営の変革」調査研究報告書（アジア経済研究所，2017年3月）。
- ・「特集：新興国における新しい農業経営」（『アジア研ワールドトレンド』No. 164，2017年10月）。

上記の研究成果はいずれもアジア経済研究所のウェブサイトからダウンロード可能である。

2018年12月

編者